〈父を語る〉

生涯仏使として

錦戸節子

〝見事に完成された人間像〟この一節どおりに、父は平成七年四月十六日逝去致しました。

物心ついてより父の大きな声、荒らげた声は一度も耳にした事がなく、叱られたという記憶もないまま父の死を迎えました。

中学二年の頃、陸上競技の練習で毎日走っていた折り、制服より帰りのバス代が二度程盗られ、「お父さんバス代を盗る人がいるのよ」と訴えたところ「そのような心をおこさせた方が悪い」と言われました。精神的に幼かった私には、何ゆえに盗られた方が悪いのかが理解出来ませんでした。又「言ってやろう、と思う事があってもすぐに口に出してはいけない。いつでも言う機会はあるのだから」これは、人と争う原因を作ったり、相手にいやな思いをさせてはならないということでした。その一言がいつ迄も心

の傷として残るということは、日頃から心せねばならないと、父の言葉を思い続けて大人になりました。

その心と形を表したと言えますのが、難病治療の第一人者であらせられる、平野有信先生の「錦戸さんの作られた仏像は、どんなにこわい表情であっても、穏やかなやさしさを汲み取る事の出来る顔に見えるが、きっといつも穏やかな心で毎日を送っていたのでしょう」とのお言葉です。

そのとおりで家族にもよそのお方に対しましても、わけへだてなくもの静かに慈愛に充ちた眼ざして接しておりました。そして、何事にも気負う事なく一歩も二歩も下がり、人の心を大切にし感謝の心と共に、もの静かに控えている父でもありました。

立正佼成会の会祖様も「錦戸先生とは二十五年にもわたってご交誼いただいておりますがそ

の謙虚さにはいつも心を打たれます。とかく名をなすとその名声に溺れてしまう人をしばしば見かけますだけに、錦戸先生の少しも変わることのないお姿に接するたびに、この方こそまさに仏師のお手本といえるのではないかと感じるのが常であります。そういう意味で、一人の人間としてまた仏師として、私は錦戸先生を心から尊敬申し上げておるのでございます」と作品集に御寄稿下されました。

佼成会の御本尊様を制作するにあたりましては、京都・奈良と二五〇ケ寺の古寺を訪れ、あらゆる仏像を眼にし研究を重ねて制作したのでございますが、会祖様は「仏像を拝むことによって仏様の心を知り、仏様のお慈悲の見守りをひしひしと感じます。その仏様のみ心、仏様の本眼を姿形に移すのは技術だけでできるものではございません。仏様のみ心を形に現すためには制作者のみ心が、み仏と通い合わなくてはならないと思います」ともおっしゃられておりますが、父は滝に打たれての修業、制作のたびの早朝三時の水ごりと、多くの精神修養と精進研鑽を重ね、天台宗の仏像には天台宗のお経というように各宗派のお経を唱え、お経の教えにもとづき制作に打ちこんでおりました。

従って、たんなる彫刻家ではなく

心にしたがって身を守り
体にしたがって身を守り
仏にしたがって生命(いのち)をつくす
生かされて生きるこの身を悟り得ば
身を粉にしても　つとめ果さん

厳寒まさにわが座を徹す
心経百巻誦し終えて
半窓樹影漸く白し
再び灯火を点に香を焚(た)き

想をこらす新仏像
時流にそむき一人古影を守り
枝のつたなさを深く思えば
寂寥慰めんと欲するに
まことに由なく
われまた是を誰にをか訴えん
斯道茫々みなみな斯(かく)の如し
朝暮必然孤峰を極めんと
ひたすらに祈る百日の行
世人の嗤(わらい)心外に聞きて
縁に従ってすべからく従容(しょうよう)

精進を我が家とし
精進を楽とす
精進の中に　安楽を看て
精進を永遠の命とす

と、詩のごとく身も心も修業に明けくれ、その信念をもっての日々は苦ではなく楽しみともしておりました。

「仏像は私が作っているのではなく、仏さまの手をお借りして作らして頂いている」のだとも申しておりました。

そのような心でなかったなら、毎日の般若心経百巻をはじめ聖天経、大黒天経、各真言千回と二時間半以上のおつとめはなし得なかったと思われます。

お経もただ読み進むのではなく、その一つ一つのもつ意味を味わわなくてはならない。また、その教えのもつ深さに涙することもしばしばであったと、小平教会、蔵野教会長様よりお聞かせいただきました。そして、三矢支部長様が「先生。お経はそれ意外にはどのようなお心であげられていらっしゃるのですか」の問いに「私の作らせて戴いた仏像を安置下さっていらっしゃる方々が、幸福にお過ごし下されるように拝ん

でいるのですよ」とも申していたとの事です。
お経の教えにもとづき研究し、父の作となるべくたゆまぬ研鑽と精魂かけての制作は、完成時においては、ふくよかなお顔と流れる線の美しさ、優雅な佇まいに「何と素晴らしい作であろう」といつも見とれざるを得ませんでした。また、父も夜中に眼ざめた折にはよくアトリエで観賞しておりました。
アトリエでの作仏との対話は心静まり、次なる制作への意欲にもつながっていったのだと思います。そして、浮かびくる詩をノートにあるいはメモ用紙に記し、夢にみた情景を眼ざめると同時にすぐ書けるようにと、枕もとにメモ用紙と鉛筆が置いてありました。従って、家のあちらこちらで詩の書かれた用紙を眼にいたしました。これらの数々の詩は、第八回個展に第二集として「仏との出会い」という題で発表いたしました。

生涯晴れがましいことを嫌った父でしたが、仏教界で最高の賞といわれております「仏教伝道文化賞」のみ再度のお話でお受けいたしましたが、その時の気持ちを〝仏天の慈悲〟との題で、

得難き法にあい
受け難き賞を拝受す
みなこれ仏天尊台の慈悲
深く深くこの理を悟る
娑婆世界は是れ
因縁因果の道
道に背かず道に従い
日夜常に精進
老いて更にこの理を感ず

と、詩にあらわしております。そして、この賞の副賞で頂戴いたしました五百万円は、障害児

の育成に孤軍奮闘しておられる、宮城まり子氏のねむの木学園に寄贈いたしました。また、受賞に際しまして毎日新聞の〝このひと〟の欄の取材で『見事に完成された人間像』と評されました。

母には夫として子等には父として、又芸術家としてこれほど素晴らしい人物はなく、錦戸新観を父にその父をささえて来たやさしく賢い（父は昨年のお正月ここまでこられたのは母がそばにいてくれたからこそと感謝の念を申したそうです）母の下に生まれ出ずる事の出来たしあわせに心から感謝しております。

告別式においては、川崎大師様、立正佼成会様、浅草寺様、前下妻市長様の弔辞、また川崎大師　高橋隆天御貫主様の錦戸家においての二七日の読経、そして、月刊誌「川崎大師だより」一面全掲載、中外日報の日本を代表する仏像彫刻の第一人者錦戸新観としての破格の七段にわたる記事、唐招提寺様における毎年の永代法要、比叡山延暦寺様をはじめ各大寺院よりの弔電と宗派を越えての弔意は、父の制作させて戴きました仏像の安置場所がいかに多かったかを知ると同時に、仏使（父は師ではなく、仏さまのお手をお借りして作らさせて戴いているのだからとの事で仏使の方を好みました）錦戸新観であったからこそと、父の人となりをあらためて知らされました。

詩集第二巻完成の折、私は父に次のような詩を贈りました。

明月や天の窓より
照らし入り
父姿作自のみ仏と
相話して
仏の心　身の心
唯暫くは同にせん

我行を仏とし
我行を詩巻とし
時刻を惜しみて念念に
新たな志専らとなす

朝な夕なの読経のまいり
仏と我身を一にして
勤行　勤行て　尚勤行
心願成就を祈り伏す

年々歳々み仏の
品格あふるる対面は
応に一刀三礼
心血の芸術

一作一作誕生す
出会える喜び
この生命（作仏のこと）

〝偏に仏のお手配〟と
愛でし花を宝前に
愛でし香華を共々に

月日重ねし　現みの父
〝一切衆生悉く仏性にあり〟
この一言につくる父なり
只、只頭たるるなり

亦、この父を
支えし母を時に知り
父母の下
生ある幸福せを
今　ここに

仏像というのは「ただ美しい」というだけではだめで、祈る者の心を打つ尊厳さと迫力、そして心を揺さぶる慈悲がなくてはいけない。さ

らに、四方八方どこから拝しましても広大無辺の慈悲と尊厳さといったものが、自然と感得されるようでなくてはいけないとも申しておりました。

一心に彫り続け、ある時は己をとことん追いつめ、生死を賭けた息詰まる思いの中で滝に打たれ、岩に坐し、一歩でもみ仏に近づきたいとの一念で、一作一作心血をそそいで彫り続け、仏を顕すためにその仏を見ようと求めてやまぬ求道の生涯は、まさに如来寿量品の経相の如くでもありました。

即ち『咸く皆恋慕を懐いて、渇仰の心を生ず。衆生既に信伏し、質直にして意柔軟に、一心に仏を見たてまつらんと欲して、自ら身命を惜しまず』と。

心願の七観音も制作成り、生涯仏使として聖業にその天命を全うし、勤め難きを勤めなすべきことをなし得て、心やすらかに旅立ってゆきました。

身をも心も仏に
おまかせ頂けし身にあれば
この世に命のある限り
鑿をとりつつ仏彫(ほとけほ)る
朝に念じ　夕べに侍り
このことのみが我つとめ

生涯家族を愛して常に親切に、そして、やさしくして下さった父でした。

そして『法眼位』という位（江戸時代後この位を、授けられた方はいらっしゃいません）と、〝人の三倍努力して一歩前進〟という父の真情は家族は勿論のこと、父を知るお方の中にも生き続けて行くことと思っております。

（錦戸新観先生御息女）